



残された家族の支えに

おおくぼ きょうへい
大久保 慶平さん(大東中3年)



僕はアイバンクの存在を知らなかった。角膜手術をすれば視力が良くなる程度の知識しかなかった。献眼するということが、自分自身や家族のことだったらと想像すらできなかった。

しかしこの記事を読んで、一つの手術にはたくさんの人々の思いがあり、今まで自分では気付くことがなかった、人の痛みや葛藤を知るき

かけになった。大切な人を亡くして、悲しみの底にいる家族の気持ちを埋めることは誰にもできない。でも亡くなった方の角膜が、目の病気で苦しんでいる人に移植され、誰かの役に立っている、誰かの目になって生きていると思うと、残された家族の心の支えにもなっていくだろうと思った。

アイバンクがもっと世間に広く伝わることで、献眼に対する人々の考えも変わっていくかもしれない。自分とは関係ないことと思わず、これから自分自身で真剣に考えていきたい。

